猿新聞

編集・発行者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
発行部数
錦生地区：100部
赤目地区：200部
ひなち・富貴ヶ丘：200部
つつじが丘：430部
市民センター：120部
名張市議会：20部
名張市役所：20部

江戸時代の日本では、おびただしい数の野生動物と共存していました。だが、当然、そのころも野生動物と人間との間にはさまざまな問題が起こり、田畑の被害などは日常的にあったはず。人々は農作物を守るため、毎日のように野生動物を追い払ったり、時によっては殺したこともあったと思います。しかし、それでも先人は、ただの一種類も野生動物を絶滅させることなく共存してきた歴史を残しています。

野生動物と共存

「昔は獣害なんてなかった」。よく耳にする言葉です。

この獣害のなかった「昔」とは、明治以降、平成初頭の約１００年間を指すと思います。

この１００年間は獣害こそ少なかったが、自然環境は、非常に不健全な年代だったと思います。

農業が始まって以降江戸時代までは、獣害はあたり前であり、先人達は、野生動物と闘いながら共存してきましたが、明治時代に入り野生動物の乱獲が始まります。

明治時代、近代化と工業化で、日本の社会は大きく変遷（へんせん）し、江戸時代禁止されていた鉄砲の入手が自由になり、生活様式の近代化は、猟師の装備を大きく変え、火縄銃から村田銃へと代わり欧米からは新式銃が輸入され、火縄銃より狩猟効率が飛躍的に向上しました。

欧米向け軍用毛皮の需要拡大にともない、外貨獲得という目的のため、狩猟による産業が起こり、明治３年頃から日本の毛皮産業が確立し、狩猟が商業化され乱獲が始まります。

この１００年間で、オオカミやトキをはじめ、18種類以上もが絶滅しています。

明治政府は、明治28年「狩猟の管理規則」を定めた法律「狩猟法」を制定し、減少に歯止めをかけていますが、

明治31年頃には、ベテランの猟師でも、野生動物の姿を見付けられないほど激減したといわれています。

保護政策は、明治以降改訂を重ねながら平成まで続き、１００年たったいま、なかには増えすぎの種もいますが、個体数は回復しています。減少してしまった個体数の回復には、１００年単位の年月がかかるのです。

現代に生きる私達は、獣害が多発することが異常だと思うかも知れませんが、歴史を振り返って考えるとき「獣害がないことこそが異常」だともいえます。

現在の獣害政策では、「認定鳥獣捕獲等事業者制度」で、狩猟の企業参入を促しています。

種の絶滅は、取り返しがつかず、二度と元には戻りません。

オオカミやトキの轍を踏んではなりません。

江戸時代以前から、「防除」と「捕獲」を両輪として、野生動物と深く関わり共存してきた、先人達に学ぶべきことが多々あります。

いま、私達に問われているのは人と野生動物の棲み分け、共存です。

これは、官・学・民三位一体（さんみいったい）で取り組まなければ成らない、いま日本が直面している大きな問題です。

いまとなっては、人間と野生動物の共存は非常に難しいことですが、未来のためにも是非やらねばならない重大な課題です。

研修会開催のご案内

研修内容
『地域で取り組むニホンザル対策について』

講師：三重県農業研究所地域連携研究課
主幹研究員　農学博士　山端　直人　氏
三重県伊賀農林事務所伊賀地域改良普及センター
主幹　市川　昌樹　氏
開催日時：平成28年7月17日（日）午前9時30分～11時30分
開催会場：名張市防災センター（２階研修室）
名張鳥獣害問題連絡会
名張市農林資源室

大量捕獲が終了し両群とも個体数が大幅に減少しましたが、今後は、捕獲後の対策が極めて重要な課題になると思われます。

つきましては、今回、大量捕獲後の対策を含めた、「地域で取り組むニホンザル対策」について、研修会を左記の通り開催させていただきます。

ご多用とは存じますが、是非ご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

サルが屋根瓦をめくるのは？

近頃、サルの人慣れが進み住宅街に出没することが多くなりました。
畑の作物を荒らすだけなく、住居への侵入など生活環境被害が多発しています。
住宅の屋根に登って瓦をめくる、アンテナを倒す等やりたい放題！。屋根瓦をめくるのは、瓦の下に潜む虫（カメムシなど）が、目当てらしい。と、これは現実（いつくしま）の話ですが、厳島神社が所在する広島県廿日市市に、こんな話が伝わっています。

『昔、山から下りてきたサルが瓦をはずして、瓦の下に潜む虫を食べた。瓦をはずすと、当然、雨漏りがするので、家の人はサルが瓦をずらしたことに気づく。
そこで考え出されたのが猿瓦（さるがわら）。大きな瓦を屋根の上に並べて重しとし、その下に並ぶ瓦をめくることができないようにした』。

サル知恵も、昔から今に、ＤＮＡでつながっているんですね。

集落全体の獣害対策

これまでにも多くの対策技術の開発が進められていますが、農家に技術が正しく伝わらないなど普及が進まない面も見られます。

特に地域ぐるみの対策については、住民の合意形成が必要となることから、思うように進まないのが現状です。

野生鳥獣被害防止対策を効果的に進めるためには、個人レベルの対応に加えて、地域ぐるみの継続的な取組みが必要です。

一人の力には限界があり、集落みんなで力を合わせた取組むことが必要です。

獣害が多発するのは、野生動物の増えすぎがその一因にありますが、営農管理や集落の環境管理にも大きな問題があります。

被害を受ける側にも、意図せず野生動物を誘引している行為があるということを、早く自覚することが重要です。

「家（うち）は、電気柵で囲ってあるから大丈夫！。」

電気柵などで圃場を囲うことは有効な対策ですが、集落内の作物のうち、柵内のものだけを守る手段にすぎません。集落全体から餌となるようなのを無くすことが大事です。

集落や田畑に鳥獣を近づけないことが一番で、既に被害が発生していても、休耕地の草刈りなど集落周辺から隠れる場所を無くし、未収穫の農作物など野生動物を誘引する原因を取り除き、見つけたら追い払いを行うなど、野生動物にとって集落が餌場として魅力のない場所にすることが大切です。

野生動物の嫌がる環境ずくりです。

農地周辺には、野生動物にとっては餌となるものが数多くあります。これらを適切に管理しましょう。

★収穫しない野菜や果樹、間引いた株は、農地に放置しない。埋設処理する。
★被害を受けた農作物も、野生動物にとってはよい餌となる。
★家庭から出た生ゴミ、クズ野菜を肥料に。農地や庭先に放置しない。
★稲刈り後は、速やかに耕耘しヒコバエや雑草の発生を抑える。
★林縁部の水田には、冬にシカやサルを引き寄せやすいレンゲ、クローバー植栽をしない。
★軒下の干柿、干芋、凍み大根など人家周辺で餌となりそうな食物は、野生動物の手が届かないように管理する。
★農道や林道の法面など、共有地に生える雑草も除草する。
★シカの餌やイノシシの隠れ場所となりやすい林縁部の草地は、定期的に草刈りをする等々。

集落や田畑全体のメンテナンスをしっかり行うことが重要です。

普段の追い払いも重要で、集落のみんなで日常的に行うことが大事です。女性や高齢者も、地域を守るために積極的に参加することも大事なことです。

普段、何気なくやっている行動が餌付けになっていることがあり、それに早く気づくことが大事です。

増える衝突事故

道路上で発生するクルマが関係する野生動物の死亡事故を「ロードキル」といいます。

動物の生息域に道路が整備されたことが発生原因の主な理由です。理由如何に関わらず、人の生死に関わる重大な獣害です。

ロードキル多発地帯には、警戒標識が設置されています。

警戒標識を見たら速度を抑え、動物の飛び出しに注意して走行しましょう。夜行性動物なので、特に夜間から早朝は慎重に運転しましょう。上向きライトにすると遠方でも動物の目が光って発見しやすくなるので、状況によって上向きライトを積極的に使って下さい。もし野生動物に遭遇しても急ハンドルは避けて下さい。ブレーキで回避できない場合は、よほどの大型動物でな

い限りまっすぐ衝突する勇気を持って下さい。

不幸にして、野生動物と衝突してしまったときは、事故の発生を警察に連絡。このとき、ドライバーや同乗者が負傷、もしくはガードレールなどの被害状況などを報告します。

任意保険を使うには所轄警察の事故証明が必要となりますが、契約内容を確認の上対処して下さい。

他にも、道路わきの排水溝内への落ち込み溺死。道路での乾燥しての乾涸死（かんこし）などの、道路による影響で野生動物が死亡することも「ロードキル」といいます。

（JAF・参考）

菜園を守る

現在の農作物の栽培形態は、病虫害に対しては、さまざまなことに配慮した栽培管理が確立していますが、野生動物に対しての配慮や対策は、野生獣の被害がそれほど問題とならなかった時代がながかったこともあって昔のままの状態。

柵や網で守るより先に、現在の捨て作り的な栽培法を改善することが大切です。

サルは、餌の魅力と人の怖さを天秤にかけています。餌の魅力が上回るから畑に侵入するのです。

私たちは、獣害対策を行う一方で、無意識に野生獣に餌付けしているという矛盾を抱えています。

これが対策の成否の、大きな要因となっています。

追い払いを強化し、農地や人を怖いと教え込みましょう。

一度、侵入を許すと防除が難しくなります。野生のサルは、早朝と夕方に採食のピークがあると言われています。早朝・夕方は見回りを心がけましょう。頻繁に畑に行って、人間の縄張りを主張することが大切です。

菜園を守るには、防護柵はかかせません。高齢者でもできる、侵入にチョット手間のかかる程度の柵でも効果があります。柵の設置が困難であれば作物を直接覆うネットも効果があります。だが、防護柵は柵内のものだけを守る手段に過ぎないということを忘れないで下さい。

支柱は頑丈にする必要があります。頑丈な支柱に茎葉を丁寧に結わえ引き抜きを防ぎます。

サルに盗られにくい作付けを考えてみましょう。サルは、視覚動物で見えたら欲しがります。

柵近くに植えた野菜や果物類は、網越しに盗られます。

柵の中では、サルの好まないものを柵側に作付け、サルの好む作物を中央側に順次作付け、外側にトウガラシ、コンニャク等サルが食べない作物を植えるなど、チョットしたことで、エサ場としての価値が下がります。柵にゴウヤーの蔓を絡ませ目隠しするのも一つの方法でしょう。

□猿の好まない作物

例：トウガラシ、コンニャク、モロヘイヤ、シソ、ワサビ、アロエ、茶、ゴウヤー、ハーブ類などです。

□猿の被害が小さくて済みそうな作物

例：ユリネ、アスパラ、キャベツ、オクラ、ホウレンソウ、ピーマン、ユリネなど。

□猿の好物

例：カボチャ、スイカ、トウモロコシ、カキ、クリ、ナス、ジャガイモ、インゲン、大根、サツマイモ、豆類などです。

サルの好む作物、嫌いな作物は、地域や学習によって異なることがあります。

追い上げ

サルの生息地を、あらかじめ整備しておき、農地・住宅地に依存したサルを山へ積極的に誘導し、そこに定着させようとする対策。

名張市農林資源室作成のサル群の移動図によると、遊動域は、森林と農地や住宅地との境界域に集中しており、自然林より二次林や竹林など利用している傾向が認められます。

この傾向は農地や住宅地に誘引された結果ではなく、すでに農地や住宅地周辺の二次林や竹林を棲家・餌場と認識してしまっているのです。

そこで、被害を誘発している住宅地や農地周辺の環境を改善すると共に、住宅地や農地から遠く離れた本来の生息地に、餌資源の豊富な広葉樹林帯を整備し、そこに「追い上げ」定着させるという野生動物にも配慮した森林管理技術の開発が、私達に求められている大きな課題です。

※二次林とは

原生林が伐採や山火事などによって破壊されたあと、自然または人為的に再生した林のこと。

平成28年5月24日、名張市防災センターで第六回モンキードッグ倶楽部総会の閉会後、東京大学大学院新領域創成科学研究科「山口　薫」博士が『モンキードッグがもたらす地域活性化―住民参加型獣害対策と村おこし』と題した記念講演が催された。

記念講演

講師の山口薫・博士は4年前にも「野生サル追い払いの成果と課題」を講演され、ご友人の安倍昭恵首相夫人が聴講されています。現在も環境社会学的な「人と野生獣との共生・共存」を研究テーマにされているようです。

サルの管理捕獲に対する講演概要では、山形県は昭和60年から有害捕獲実施（近年400頭から600頭捕殺）が全国でもトップレベルであったが、平成17年度「野生鳥獣共存推進調査」などにより大量補殺はサルを「パイオニア型＝ゴロツキ化」し「被害がなくならない」と判断。

補殺することで『群が弱体化し他の群れの浸入を許すようになり、他の群れから吸収されて大きい群れ→更なる遊動域の拡大につながる→被害地に出没するサル頭数増加や離れザルの増加』の悪循環。

この経緯を踏まえ、サル群れに対し『被害を出す群れのタイプから被害を出さない群れのタイプに誘導』するため『サルが被害地域に頼らずに生きていける環境を作り上げる』という短・中・長期の山形県の取り組み事例を紹介。

大量の補殺はサルを「ゴロツキ化」するだけで、長期的視点で、人間とサルを含む野生動物との共存の関係つくっていかなければならないと強調され、サル被害の背景には人為的な自然破壊なども一因と指摘。

講演後、聴講者の感想は、「サルや野生獣との共存」は正論。しかし、「ワシ、10年も待ってたら死んでるわ。」という声は、目指すべき理想と現実の『温度差』を実感したところです。

（文・畠山ひさ子氏寄稿）

指導員報告

サルの出没状況

名張A・B群

6月のサルの動向

A群は、先月から今月中旬まで青蓮寺ダムの周辺で桑の実に集中。

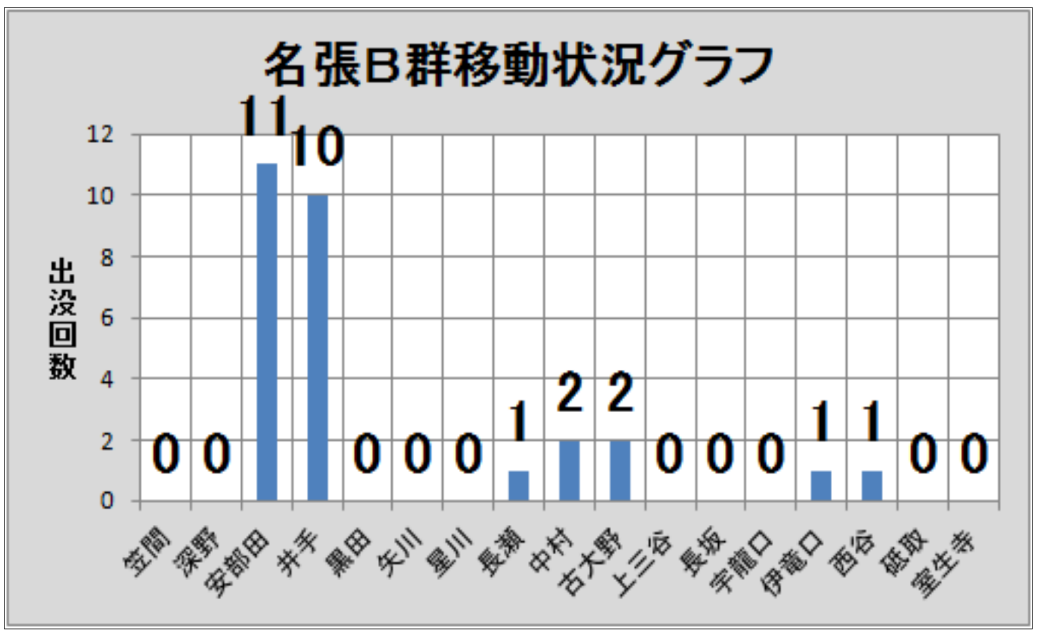
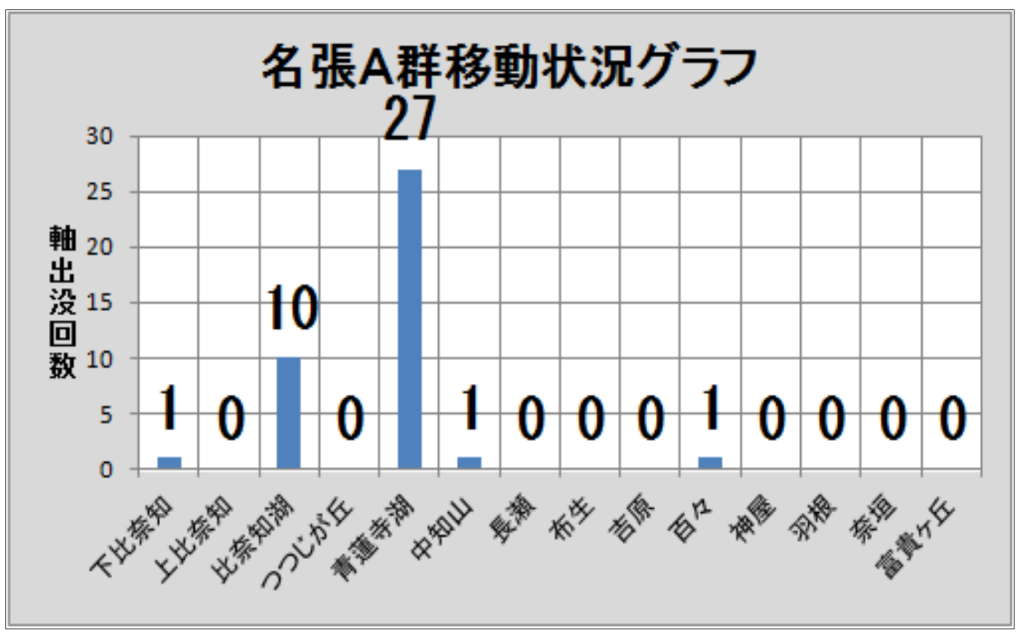
今月中旬以降は比奈知ダム周辺。19日以降は、また青蓮寺湖に戻ったようです。

B群は、今月初旬までは、安部田地区から室生深野地区の山奥を遊動していましたが、今月中旬は、「やまなみロード」周辺で受信・目視。

井手・坂ノ下では、はぐれ1～2頭が早朝に目視されることが多かった。

今月の大半は165号線の北側で活動していましたが、20日には、竜口周辺で電波受信がありました。

A・B群共に、何度か畑に出没したと言う情報もありました。

B群は、大量捕獲後ゲリラ的な動きがみられます。

6月後半からは、サルの動きが活発になり、畑作物の被害が多発する季節ですので、注意して下さい。